統合型HTP法に関する研究の展望

—「統合性」・「遠近感」・「人と家・木との関係付け」に着目して—

渋川　瑠衣*・松下　姫歌*

The Prospects for the Psychological Studies of the Synthetic HTP Technique.
—Focusing on "Integration", "Perspective" and "Correlation of house, tree and person"—

Rui Shibukawa・Himeka Matsushita

This paper reviews the psychological studies on Synthetic House-Tree-Person Technique (S-HTP) in terms of 1) its clinical approach, 2) its development, 3) in its content, 4) in its structure, and it considers those studies from the viewpoint of "Integration", "Perspective" and "Correlation of house, tree and person".

The results were as follows: 1) S-HTP was effective to the understanding of drawing person's state. 2) It was indicated that a developmental arrest especially reflected in the "Half-Stick-figure" phenomenon and the whole evaluation system. 3) It was suggested that the interpretation of the "correlation of house, tree and person" had to be examined from more concrete arrangement. 4) The character side expressed in S-HTP by the execution order was different.

Moreover, we suggested the possibility that viewpoints of "Integration", "Perspective" and "Correlation of house, tree and person" were able to be integrated from the viewpoint "Way of the composition of the ego", as one viewpoint of a new evaluation system that evaluated the composition pattern of the entire drawing.

key words; review, Synthetic H-T-P Technique, the whole evaluation system

1．問題

1)　個と環境との関係を心的次元から捉えるアプローチとしてのS-HTP

心理臨床において，クライエントの総合的かつ多面的なパーソナリティや心的状態の把握，心理学的・精神医学的・社会的な問題のアセスメントは重要な過程の一つである。心理学的アセスメントにおいて，クライエントの抱える問題を，＜関係性＞の視点から捉えるということが注目されている。家族，学校，職場，地域社会といった様々な環境との間で問題を生じ，困難を感じているクライエントについて，単に，個人が環境と関係を築くことが出来ているか否かといった，表層に顕

* 広島大学大学院教育学研究科 (Graduate School of Education, Hiroshima University)

在化している個人ー環境の関係の状態像を捉えるだけではなく，彼／彼女が生きている心的次元における関係性からも捉えようとすることは，表層の状態像の背後で，クライエントがどのような取り組みをしているのかを知ることに繋がりうる。つまり，クライエントの心的現実において外的現実がどのように捉えられているか，外的現実における対象との関わりが，心的次元においてはどのようなものと，どのような関わりを持ち，格闘することになっているのかといった，クライエントの心が既に取り組み始めている心的作業を知るための手がかりとなりうる。

このような個人と環境との関わりを心的次元において捉える方法として，家・木・人という3つのアイテムを1枚の画用紙上に描く，統合型HTP法（Synthetic House-Tree-Person technique，以下，S-HTPと略）があげられる。S-HTPは，Buckの考案したHTP法の変法の一つであり，日本でも，HTP法の発表まもなくから，細木・中井・大森・高橋（1971）の「多面的HTP」や丸野・徳田・荻野（1975)の「統合House-Tree-Person法（Syn. H・T・P)」など，多くの臨床家によって，それぞれの創意工夫による「統合型」のHTP法を用いた臨床と研究が行われている。これらの取り組みと知見を踏まえて，三上（1979）は，言語的なアプローチを適用し難い統合失調症患者にも実施できる簡便で侵襲性の低いアプローチとしてS-HTPを取り入れ，現在まで継続的な研究が行われている。現在，病院臨床をはじめ，教育，非行臨床など幅広い領域で用いられるとともに，多くの臨床家・研究者によって研究がすすめられており，描画者の心的次元における対象関係性を多面的に捉えるアプローチの一つとして，その有用性が認められている。

2) 描画法におけるS-HTPの特徴とその位置づけ

1枚の画用紙と筆記用具，そして「家と木と人を入れて，何でも好きな絵を描いてください」という教示によって始められるS-HTPは，Buckが考案した家・木・人を別々の画用紙に描く従来のHTP法とは異なり，同一画面上に全アイテムを描くという手法を用いている。この課題構造面における変化は，描画に対して抵抗感を抱いている描画者や活動性の低下した描画者の時間的・心理的負担を低減させるという実施面における改善をもたらすと同時に，各アイテム単独から得られる情報に加え，アイテム間の相互関係や統合性，遠近感などといった，それまでのHTPにはなかった新たな観点を生み，「内容の広がりの自由と，構成の自由」（市川, 1988）という特徴的な描画構造を提供している。その点で，S-HTPは，「自由画よりも構造化されており，課題画よりは自由度が高い」（前川, 1996）という特徴を有している。この特徴により，単一アイテムの描画テストに比べて描画発達の上限が高く，精神的な成熟の度合いをより綿密に，長期間にわたって測定できるという利点があるとされている（三上, 1995)。

「家と木と人を描く」S-HTPは，描かれる対象が一つに限定されている描画法に比べて，より広範囲の環境との関わりをめぐっての，描画者の心的次元における対象関係性の在り方が現れやすい。この点に関し，家・木・人という3つのアイテムには豊かな象徴性が付与されているとされており（Hammer, 1958)，例えば，「家は家庭との関係を，木はより無意識的な自己像を，人はより意識的な自己像を表す」（三上, 1995）といった象徴的仮説が見出されている。

こうした象徴性により，S-HTPには，家族画のような直接的な課題に対する抵抗が起こりにくい

（三上, 1995; 三上・平川・尾崎・芦澤・坂野, 1998）とされており，描画者が，様々な環境との関わりを巡って，どのようにふるまっているのかといった関係性の基本的なところが投影されやすく，様々な対人関係の中で描画者が行っている「現実的な対処の仕方」や「社会内での適応状態」が表れやすいとされている（桑原・森永・濱野・山崎・千葉・萱島, 1998）。

3) S-HTP における「全体的評価」

S-HTP は，HTP 法と同様に，家・木・人という各アイテムの描かれ方を通して，心的次元における自己像や対象像の捉えられ方を見ていくという視点を有している。しかし，アイテムの簡略化が生じやすい(三上,1995)ことが指摘されていることからも，一つの画面に 3 つのアイテムが描かれることによって，描画全体として何が表されうるのかを読み取るための視点が，S-HTP にはより必要となる。この点に関し，三上（1995）は「全体的評価」として以下の 8 つの観点を提示し（Table 1），これら全体的評価や他のアイテムとの関連における評価を重視している。

描画法における描画の読み取りに関する信頼性・妥当性の研究において，描画の部分的特徴よりも全体的な評価の方が信頼性が高いことが指摘されているが，S-HTP の描画特徴の研究（三上, 1979; 中河原・小見山, 1981; 須賀, 1985 など）においても，Table1 に示した，「統合性」や「遠近感」と

Table 1　S-HTP における全体的評価項目（三上, 1995 を基に作成）

評価項目	分析項目	反映する人格的側面の特徴
①統合性	羅列／媒介による統合／やや統合的／明らかに統合	人格水準を総合的に判断するもの。現実検討力・集中力・持続性・積極性・柔軟性・創造性などの能力。
②描画サイズ	全体的／部分的／真空化／4 分の 1 以下	内的エネルギーの高さを反映するもの。また，描画者の環境との関わりを反映するもの。
③付加物	なし（地なし・あり）／あり	パーソナリティの豊かさや積極性を反映するもの。付加物の種類によって発達水準の推測が可能。
④遠近感	なし（バラバラ・直線重なりなし・あり）／ややあり／中／大	知的・情緒的な成熟の程度と視野の広さ，及び捉え方や視点の位置。
⑤人と家・木との関係付け	人前方／人・木前方／並列／人後方／家の中	描画者の心的な拠り所，または何らかの行動を起こす際の基準。家族や自己との結びつきの強さ。
⑥描線および形態の確かさ	筆圧／不統合／破線／ふるえ／複数線／歪み／奇妙な表現／シンメトリー／幾何学模様	人格の安定さを反映するもの。物事に取り組む際の姿勢やエネルギー水準，自身の度合いを示す。シンメトリーや幾何学模様など奇妙な表現は，時に病的サインとして判断される。
⑦切断	なし	描画者の未解決な問題や葛藤の存在の可能性を示す。
⑧修正	なし	テストに対する動機付けの程度や，要求水準の高さ，不安感の程度，集中力や決断力を示す。

いった全体的評価項目に，描画者の心的状態の特徴がより顕著に示されることが指摘されている。このような特徴を有する全体的評価項目のうち，特に「統合性」「遠近感」「人と家・木との関係付け」の3項目は，複数のアイテムを同一画面上に配置するという，S-HTPのような「統合型」の描画法特有の評価項目であるといえる。また，家と木と人という豊かな象徴性と親近感を抱きやすい3つの異なるアイテムの相互関連性の要素や，「遠近感」など他の項目とも関連している「統合性」の項目は，「S-HTPの最大の特徴は，3アイテムの統合性の評価である」（福西・菊池・溝口, 2000a）と言われるように，最も本質的で，重要な評価項目であるといえる。

2．目的

本研究では，環境との関わりをめぐっての，描画者の心的次元における＜関係性＞の在り方を捉える方法としてS-HTPを取り上げ，この特徴を捉える視点として「全体的評価」に着目し，その中核と考えられる「統合性」・「遠近感」・「アイテムの関係付け」の３点に関し，先行研究のうち，基礎的なものを中心に検討することを目的とする。

3．方法

S-HTP研究を展望するにあたって，以下の方法を用いて文献検索を行った。

1）CiNiiによる検索

国立情報学研究所が提供するCiNiiを用いた検索を行った。発行年については特に制限は設けず，「論文名」あるいは「キーワード」に，①「S-HTP」という語句が用いられていることを条件に検索を行ったところ，14本の論文が抽出された。また，②「統合型HTP」という語句を用いて検索を行ったところ，19本の論文が抽出された。

2）引用文献による検索

上記の検索方法によって抽出された論文および1冊の書籍において引用されている文献を対象とし，同様の条件を設定した検索を実施した。

これらの検索により抽出された論文のうち，重複している論文を除き，かつ，基礎的研究に絞ったところ，27本の論文と書籍2冊が抽出された。

4．S-HTPの基礎的研究

S-HTPの基礎的研究は，大きくわけて，1)臨床群の特徴をS-HTPを通して把握しようとする臨床的側面に関する研究，2)S-HTPに表われる発達的側面に関する研究，3) S-HTPと他の心理検査との関連に関する研究, 4) S-HTPの評定方法やテストバッテリーの順序効果など活用方法に関する研究，の4つの流れがある。これら4つの流れについて概観する。

1)　臨床的側面に関する基礎的研究

三上（1979）は，自身の精神病院での臨床活動の中で，統合失調症患者の「簡便かつ包括的把握の可能なテスト」として，それまで細木他（1971）や丸野他（1975）が報告していた家・木・人の

3つの課題を1枚の画用紙に描く「統合型」のHTPを採用し，一般成人と統合失調症患者の描画を統計的に比較・検討した。非統合性や遠近感の欠如，画面使用範囲の狭小化・真空化などの全体的評価項目を中心に多数の項目で有意差が認められたこの研究の中で三上（1979）は，S-HTPは，「被験者の世界関連やその中での自己像を捉えるには，統合型の方がより有効なのではないか」とその可能性を示唆した。その後も，統合失調症患者を対象にした研究は多くなされており，慢性統合失調症患者の全体的な描画パターンに注目し，数量化3類を用いて検討を行った結果，「全体のまとまりをあらわす」1軸と「構成要素の相互関係性を評価する」2群を抽出し，「相互の位置関係や大小関係などが考慮されておらず，平面的・羅列的なものが多い」という統合失調症患者の描画特徴を明らかにした須賀（1985）や，同じく数量化3類を用いて統合失調症患者の描画を判読する際に有効な視点を検討した市川（1988）は，「全体の構成力」「画面使用度」「運動表現」「描画内容の広がり」の第1軸と，「筆圧」「描線コントロール」「課題の形態質」の第2軸，「人物像の記号化」の第3軸の3つの視点を抽出し，第1軸が「連想，選択，関係性の考慮，統合といった，発展的，有機的な精神活動の在り方」，第2軸が「自我境界，ボディイメージ，現実感，現実検討力の在り方」，第3軸が「病者の防衛力の一側面，あるいは，意欲や表現力の発動性，投影力の問題」と関連する可能性を指摘した。この他にも，統合失調症患者に実施したS-HTPの全体的評価項目に関して因子分析を行い，「統合的現実性」「快適感」「空間性」「色彩の豊かさ」の4つの因子を抽出した森田（1989）の研究や，統合失調症患者の描画の継時変化の分析と，S-HTPの全体的評価に関係する変化因子と関係しない不変化因子に関して検討を行った高良・大森（1994）の研究がある。

また，家・木・男・女という4つのアイテムを同一画面に描かせる独自のS-HTPを，破瓜型と妄想型の統合失調症患者，神経症患者と，患者と一般成人に実施し，一般成人のアイテムの構成パターンによって4つに分類し，比較・検討した中河原・小見山（1981）は，一般成人においては，「家と木が背景で，人の姿が主体となるパターン」や「家と木が舞台装置となり，人の姿が主体となるパターン」が多く見られるが，統合失調症患者は，「家・木・人の並列パターン」を多く示し，病態の違いによって，そのイメージを構成する「イメージの舞台性（舞台と登場人物の姿からなるパターン認識の基礎）」も異なることを指摘している。統合失調症患者とうつ病患者の描画特徴の比較から，両者の描画は表現形としては類似しているが，うつ病患者の方が，統合性が低く空虚な空間が多いなど，全体の構成に関する項目において「崩れ」が見られることを明らかにした越川（1989）の研究があり，様々な観点・方法による研究が行われている。

2)　発達的側面に関する基礎的研究

S-HTPの施行可能な年齢の下限は，教示による3つのアイテムの描画率が9割に達する幼稚園年長児であることが明らかとなっており(三上,1995)，幼児や児童を対象に行う場合は，S-HTPの精神発達の測定法としての機能が，思春期以降を対象に行う場合には人格テストとしての機能が有効に働くとしている（三上・岩崎, 1981)。また，三上(1995)は，幼稚園年長児から大学生までを対象に，S-HTPに見られる描画的発達について，多くの項目から実証的に検討している。このうち，「全体的評価」における「統合性」「遠近感」「人と家・木との関係付け」に関する知見として，S－HTP

の下限である幼稚園年長頃から，「媒介による統合」が少数見られ，小学校低学年頃になるとアイテム同士の関係付けが徐々に増加し，各課題を関係付けて配置し構成できるようになり，統合性の高い描画の出現率が高くなっていくことが明らかになっている（三上, 1995)。また遠近感は，抽象的思考への移行が始まる中学生頃から徐々に見られ始め，高校生で上限に達することが認められている（三上・岩崎, 1981)。

三上他（1998）は，少年事件調査実務へのS-HTPの導入の目的から，14歳から19歳の非行少年のS-HTPの発達的特徴を検討している。三上（1995）で得られた一般群の発達的特徴の変化との比較を行った結果，統合性や遠近感といった全体的評価項目のうち，特に「媒介による統合」や「遠近感なし」といった全体の構成に関わる項目において小学校低学年群と同程度の出現率を示し，非行少年が知的発達や情緒的な発達において未成熟な段階にとどまっていることが示唆された。また，1981年と，1997年から1999年の間に実施された小学生のS-HTPを比較し，日本人児童の描画発達を検討した三沢（2002）は，1981年の調査において認められていた小学校3年生以後の統合性の度合いの急激な上昇が，1997年から1999年に行った調査では見られず，統合性の度合いが3年生ぐらいから停滞していることが明らかにした。このことに関して三沢（2002）は，核家族化や地域社会との関係の希薄さによって生じる孤立した生活が，このような描画発達の停滞に影響しているのではないかと考察している。このような統合性の度合いの停滞は，在日外国人児童とボリビア在住のボリビア人児童との描画特徴の比較を行い，移住経験が子どもの描画発達に及ぼす影響を検討した田中・阿部・井上・岩木（2007）の研究でも，同様に認められている。この研究の中で，ボリビア人児童と在日外国人児童の各学年における統合性の度合いの相対的位置を，ロジステック回帰分析を用いて推定した結果，前者では学年の上昇に伴って統合性の度合いが増していくのに対して，後者は学年の上昇による統合性の度合の上昇が見られず，統合性の発達において停滞が見られることを明らかにした。田中他（2007）は，在日外国人児童の多くが家庭の支えの不足を感じている可能性を指摘した上で，統合性の発達の停滞という描画特徴が子供を取り巻く環境や状況の影響によるものであると考察し，移住による喪失体験と異文化への適応という課題を負った彼らが感じている自らの家族の存在と，発達に伴う統合性の度合いとの関係を示唆している。

この他にも，家・木・人に動物を加えた独自のS-HTPによって，描画の中に動物や樹木がいかにして描かれ，どのように発達的に変化するのかを検討した稲田（2003）や，大学生の描画の発達的変化を検討した田畑（2006)，小中学生と施設養育児のS-HTPを半スティックフィガー現象と太陽アイテムに焦点を当て検討した小山内・玉田（2006）の研究が存在するが，いずれの研究においても，調査対象の年齢にかかわらず，発達の停滞や描画者の幼児性，自己中心性のとどまりなど，描画発達の変化が起こっていることが指摘されている。

田畑（2006）は，三上（1995）の発達的研究と現代大学生の描画特徴の比較を行った結果，人物の人数や付加物の出現率は三上（1995）の大学生の結果と同程度のものであるが，「明らかに統合」や「遠近感中」といった，発達に従って増加する画面の構成に必要な項目の出現率が，三上（1995）における同年齢群の半分程度しか見られないことなどを報告している。また，小山内・玉田（2006）は「表情を持つスティックフィガー」である「半スティックフィガー」が，「人を顔で認識する幼児

の心理状態と共通する」と考えられることから，現代の子供たちの幼児性を映し出しているとして，現実に立ち向かい克服していく意欲（「生きる力」）の低下が，無意識に簡略化された人物画を描いてしまう心性として働くのではないかと考察している。

3) S-HTP の描画特徴を他の質問紙や心理検査との関連から検討した研究

質問紙や心理検査など他の尺度と S-HTP の描画特徴との関連を検討した研究では，質問紙などを用いて測定した人格的側面が，S-HTP のどの部分により顕著に表現されているかということを明らかにすることで，S-HTP の新たな解釈仮説の視点提供を目的にしている。そして，これらの研究の多くが，家と木と人という 3 つのアイテムの位置関係に注目し，その関係性を中心に解釈を行っているといえる。

吉川（2005）は，中学生を対象に，親に対する感情や家族の状況が S-HTP の表現にどのように影響するのかを検討し，家・木・人の位置関係から家族への依存と独立の様子が推測できることを明らかにしている。家と木の間に人を描いた「中間群」は，独立欲求が高く，家庭内も自分自身も安定している状態を示唆しているのに対し，家の中に人を描いた「家の中群」や木寄りに人を描く「木寄り群」，家寄りに人を描く「家寄り群」など，人が家や木に接触，近接している群はいずれも，依存欲求の高さや独立欲求の低さ，あるいは両者の葛藤状態にあり，自己も家族関係も不安定になっている状態を示しているとしている。

根本（1998）は，大学生を対象に，ロールシャッハ・テストの体験型と S-HTP のアイテムの位置関係との関連を検討しており，三上（1995）が提出した「人と家を関係付けた場合は外拡型に，人と木を関係付けた場合は内向型に相当する」という仮説を実証している。加えて，S-HTP を使用することによって「内向型」に包括される質的な差異を読み取ることができるということを明らかにし，同じ内向型でも，S-HTP では「木寄り群」と「家の中群」の 2 タイプに分かれ，より豊かな内面生活や安定した情緒や運動性を示し，適応的である群（木寄り群）と，自己統制や現実吟味能力，適切な人間関係を形成するために必要な感受性が乏しく，他人との接触を避けたり，適度な自己表現が困難な傾向が示唆され，社会的適応能力が低い群（家の中群）を見出すことが可能であることを指摘している。

青山・市川（2006）は，アイデンティティ感覚と S-HTP における描画特徴との関連を探索的に検討した結果，アイデンティティ感覚の様相が，S-HTP の「遠近描写」や「人と木の関連付けの仕方」，「人物表現の明瞭度」，「木の枝と根の描写」に反映されることを明らかにした。また，S-HTP が，アイデンティティ感覚の中でも特に，「他者に見られている自己と自分自身が感じている本来の自己イメージが一致しているという感覚（対他的同一性）」に関連していることを指摘し，「遠近描写」と「人と木との関連付けの仕方」については，質問紙では把握しにくいアイデンティティ感覚の質的な差異が反映される可能性を指摘している。

具体的には，「遠近描写」においては，同一性確立群には適度に遠近が表現された描画が多く，一方，同一性拡散群には《遠近を欠く描画》と《極端に遠近の強調された描画》といった 2 タイプが多く，同じ拡散群の中でも，遠近描写の 2 つの在り方に内面状態の質的な差異が反映されている可

能性を示唆し，前者は，柔軟性を欠いて膠着した内面状態，後者は，環境に対して違和感・疎外感を感じている状態を反映している可能性を指摘している。また，「人と木の関連付けの仕方」に関しては，自己の斉一性以外の3次元のアイデンティティ感覚との関連が示されており，①対他的同一性(他者から見た自分と本来の自分の一致感)の低い場合，あるいは，心理社会的同一性(社会における自分の意味づけ)の高い場合は，「人が木と接する」「人が木に登る」描画が多く出現し，②対自的同一性(自己の欲求や目標の明確感)の高い場合は，「人が木と接する」に加え，「人が木を見る」描画が多く出現するなど，アイデンティティ感覚の確立・拡散状態によって多様な関連付けが見られ，この関連付けが，質問紙では把握しにくい青年期の発達課題であるアイデンティティ確立の作業に必要な，「内面生活」おける心的活動と関係していると推測している。

4) S-HTPの評定方法やテストバッテリーの順序効果など活用方法に関する研究

福西他（2000a）は，S-HTPの最大の特徴である「統合性の評価」に関する測定とその指標化に関する研究が乏しいことを指摘し，1) 3つのアイテムがすべて描かれているか（「課題欠如」），2) アイテムの配列および位置の空間象徴学的意味（「画像配列」），3) アイテムのサイズのバランス（「サイズのバランス」），4) 遠近感の有無（「遠近感」）という4点に注目して，統合性の評価に関するプロトタイプを提示しているが，信頼性・妥当性については今後の検討が必要である。

市川（2004）は，バウムとS-HTPの施行順序の効果検討を行い，緊張・不安場面におけるテスティ像を知りたい場合は，バウム・S-HTPという施行順序が適しており，テスティと環境との関係性を知りたい場合には，S-HTP・バウムの順が適していることを明らかにしている。

5．考察

前節では， S-HTPに関する基礎的研究を，1)S-HTPに関する臨床的研究(臨床研究)，2) S-HTPに現れる描画発達に関する研究（発達研究），2) S-HTPの描画特徴を他の質問紙や心理検査との関連から検討した研究（内容研究），3) S-HTPの評定方法や順序効果など活用方法に関する研究（構造研究）の4つに分け，概観してきた。本節では，これらの先行研究を踏まえて，８つの全体的評価項目の中でもS-HTPに特徴的と考えられる３つの項目，すなわち「統合性」「遠近感」「人と家・木との関係付け」について考察する。

1) 統合性

統合性は，全体的評価項目の中でもS-HTP最大の特徴とされ，「パーソナリティを総合的に評価する上で，最も重要な判断基準」（三上, 1995）とされている。しかし三上（1995）は，この「統合性」に関して，「統合的に描かれているか，羅列的に描かれているか」という説明にとどまり，詳細な定義を行っていない。その一方で三上（1995）は，「本当に調和の取れた統合的な絵を描くためには，大きさのバランスや，遠近感，家と木と人の関係付けや，それらを繋ぐ付加物など，いろいろな要素を考慮する必要がある」と指摘していることから，三上（1995）において統合性とは，全体的評価項目を構成する他の項目をも含み，相互に関連し合う，多面的な諸側面であると推測される。

このような多面的特徴を有する「統合性」の定義については，「課題の関連付けの程度のこと」（三上他, 1998）や「各課題を関連付けて配置し，構成的に描いているかどうか」（平川・尾崎・芦澤・坂野, 1997）といった，３アイテムの関連付けと構成の程度であるとするものがあるが，その基準をどのように考えるかについては，いくつかの見解がある。

桑原他(1998）は，“統合性がある”状態を，基底線の有無，遠近感の有無，動きの有無，ストーリー性の有無などから判断される，「各アイテムが関連性を持って同一平面に描いてある状態である」としている。また，須賀（1985）は，複数の物事を相互に連合させ，余分なものを排除して一つのまとまりのある全体とする能力を「統合力」と呼び，「各アイテムの関連性が積極的具体的であり，意味が明瞭で物語性が見られるもの」を統合性と呼んでいる。

これら「統合性」に関するいくつかの見解を整理していくと，3 つのアイテム間に意味的・ストーリー的関連性があり，1 つの全体としてまとまりがあるかどうかということに関しては，三上（1995)や統合性に関する分析項目（三上, 1979, 1995; 三沢, 2002）の内容も含めて，いずれの研究者においても一致しているといえる。このような「意味的・ストーリー的関連性」を持つ「一つの全体としてのまとまり」に，更に「遠近感」(三上,1995; 桑原他,1998）や「基底線の有無」(桑原他, 1998）といった視点を加える立場は，「一つの全体としてのまとまり」が同一次元に位置付けられるという視点を強調したものであると考えられる。

臨床的側面において「統合性」は，「自我境界の脆弱性」（市橋, 1984）や「統合力の障害」（須賀, 1985）が中核の問題とされている統合失調症患者の統合度や，統合性の在り方が明確に表現される項目とされ，鑑別や経過類型の弁別，予後の推測などに有用であることが指摘されている（須賀, 1985; 市川, 1988; 森田, 1989; 越川, 1989)。また，非行少年の描画においても，統合度の低さが指摘されており（平川他, 1997)，それが「自己と環境とのつながりが希薄であったり，自己と環境との関係をきちんと認識できていないこと及び安定した自己像を持ちえていない」（平川他, 1997）ということの反映であるとされている。

「内容の広がりの自由と，構成の自由」（市川, 1988）という 2 重の自由を有している S-HTP の枠組の中で，その自由を生きるには，アイテム同士を関連付ける創造性や柔軟性が必要であり，描画空間における心的対象への没入と対象化を通じて捉えようとする心的対象を，統合・構成する主体としての自我が必要となる。統合性は，こうした自我機能と関連が深いと考えられる。

しかし，統合性の「程度」が，単なる統合性の高さ低さという側面のみで見られるだけでは，表層的に「統合度が低い」という状態像をなぞるだけにとどまってしまう。むしろ，単に統合度の高低でなく，分析者の目の前にある描画が，どのように統合されているかという，「統合性の在り方」の質を細やかに見出す視点を発掘していくことが，心理臨床においては重要であると考えられる。それは，「統合度が低い」と見える状態像の背後にどのような心的働きがあり，どのようなものが心的にキャッチされているのかを見出すことにつながり，そのことが治癒力や発達の力の萌芽を見いだしサポートすることにつながると考えられるからである。

そのための方法の一つは，三上(1995)の提示している全体的評価項目のそれぞれに表れうるものの，幅と深さを読み取っていく視点を，丁寧に，一つ一つ発掘していくことと考えられる。

2) 遠近感

描画に遠近感を持たせるためには，「課題の配置・大きさのバランス・付加物・課題の立体表現などの工夫が必要」（三上他, 1998）であり，「ある程度の知的・情緒的成熟や心の柔軟性があってはじめて表現される」（三上, 1995）ものとされている。S-HTP の描画発達に関する三上の一連の研究（三上, 1981, 1995）において，遠近表現は，自我の対象把握が可能になるとされている小学校高学年頃から出現し始め，思春期頃に上限に達することが指摘されているが，その後行われた研究（三沢, 2002）で，現代の子どもの描画発達が，20 年前に比べて遅れていることも指摘されており，遠近表現に関しても同様に，発達の停滞が指摘される結果となっている。また，画用紙という 2 次元空間においては「遠近感」として表現される，画面に構成された風景を見る“視点”と“対象”との距離関係は，自分自身を捉える視点の距離関係と等価であり（高石, 1996），遠近感の表現はすなわち，「ものをみるときの自我の座」（高石, 1996）を示すものとして捉えうる。この「遠近感」が示唆する自我と対象との距離関係の問題と，上記の知的・情緒的な成熟の程度を示すことなどを総合すると，「遠近感」は，自我発達の様相を反映する重要な指標と考えられる。

臨床的な側面において，統合失調症患者の描画には，「遠近感」が乏しい，あるいは見られないものが多いという特徴を報告する研究は多い（三上,1979; 中河原・小見山, 1981 ; 須賀, 1985; 市川, 1988 ; 森田, 1989; 高良・大森, 1994）。この点について市橋（1972）は，「内的な奥行き感の喪失」の表現として，つまり，心の自由な動きや柔軟性に乏しい統合失調症患者の状態が，描画における遠近感のなさとして表現されると指摘しており，統合失調症患者の鑑別に有効な指標となり得るとしている（市川, 1988; 森川, 1989; 高良, 1994）。しかし一方で，S-HTP の描画における「遠近感」のなさや乏しさは，欝病者（越川, 1989）や非行少年（吉武・森山・鈴木, 1994; 平川他, 1997; 三上他, 1998）の描画にも見られ，更には，健康な大学生（青山・市川, 2006）にも見られることが報告されている。

それでは，「遠近感」とは，どのような心的体験や心的働きを反映しているのであろうか。先にも述べたように，S-HTP における「遠近感」の出現が，自我の対象的把握が可能になるとされている 10 歳前後と同時期であることからも，遠近表現に欠かせない視点の定位性と，“統合性・構成の中心としての自我”の関連性が推測できる。このように，遠近感を“統合性・構成の中心としての自我”の在り方を示すものとして捉えた場合，前節で見てきた“心的対象を統合・構成する主体としての自我”と関連していると考察した「統合性」に表現されるものとはどのように異なるのだろうか。

遠近感は，「現実の生活空間における他者や外界とのかかわりの程度や現実適応性」（森田, 1989）を表すとされる一方，「連想，選択，関係性の考慮，統合といった，発展的，有機的な精神活動の在り方」（市川, 1988）を反映するとされている。これは S-HTP における遠近感が，描画者が，外的現実での対象との関わりの在り方をどのように捉えているかという，いわば外的現実次元における認知的側面を反映していると考えられる面がある一方で，外的現実に表出されている行動や関係性の根底にある，心的現実における対象との関わりの在り方を示しているという，統合性に内包される２側面の存在を示唆するものであると考えられる。つまり，描画者が，外的現実次元における対象

との関わりを持つことを通して，心的現実次元においては，その外的現実における対象によって象徴される心的内容を整理し，捉えようとするといった，本来は一繋がりの心的営みの中にある二つの次元・局面といえるかもしれない。

この点に関し，臨床的な側面についての研究として挙げた諸研究の対象者が，いずれも青年期であることを考えると，青年期の発達課題であるアイデンティティの確立の問題に関する“自己感覚の揺らぎと統合”の様相との関わりが一つには考えられる。青山・市川（2006）は，アイデンティティ感覚が確立している群が適度な遠近表現を行うのに対し，拡散群は極端な遠近感を強調した描画，あるいは，遠近感が全く欠如した描画を示すという結果を報告している。極端な遠近感について，三上，(1995）は「あまりに距離感のある絵は，自分の環境に十分馴染んでないある種の違和感や疎外感を表す」としており，遠近感は，描画者の自身を取り巻く環境との関係や感情をも推測できる項目であるとされている。これらのことから，遠近感は，一つには，自己感覚を，自と他，個と環境との間で揺れ動きながら，掴んでいくプロセスのさまざまな局面を反映している面があると考えることができるかもしれない。

また，臨床的にも，「遠近感」は，先の統合性とは異なり，病態や治療状況などによって変化し，描画時の心的状態を極めて敏感に捉える（高良・大森, 1994）とされている。遠近感が，こうした自己の成立にまつわる揺れの諸相の反映として見ようとする時，それは，しばしば指摘される青年期における発達的課題と統合失調症における中核の問題との近縁性を示す可能性を示唆する面がある。しかしさらに重要なのは，青年期の発達的課題と統合失調症における臨床的課題の質的な差異と，正常と異常を超えた近縁性の両方を，遠近感表現の中に見いだしていく視点ではないかと考えられ，今後，そうした視点を発掘していくことが必要になってくると考えられる。

3) 人と家・木との関係付け

従来の研究では，家・木・人という S-HTP 特有の 3 アイテムの相互関係には，「自己と環境との関わり方，意識的な自己像と無意識的な自己像との関連性などが投影される」（平川他, 1997）とされており，三上（1995）は，人を家に結び付けて描くか，木に結び付けて描くかという，3 アイテムの具体的な関係付けが「重要なポイント」であるとして，描画者のパーソナリティの特徴を推測する際にも重要な観点であるとしている。先に述べた「統合性」の評価も「遠近感」の評価も，結局は家・木・人という 3 つのアイテムをどのように関連付け，どこに位置づけ，まとめ上げているかに関わるため，この「人と家・木との関係付け」の項目は，各アイテムに付与されている象徴的解釈やアイテム間相互関係から描画者のパーソナリティの特徴を推測する際にも，全体的評価を判定する際にも重要な観点であるといえる。

アイテムの関係付けに関しては，様々な観点からの研究が行われ，多くの知見が提供されている（根本, 1998; 吉川, 2005; 青山・市川, 2006)。これらの研究知見を整理すると，ロールシャッハ・テストにおいて「外拡型」を示した「家寄り群」（根本, 1998）は，家族からの影響を受けやすく葛藤状態にあること（吉川, 2005）や，他者に見られている自分と本来の自分が解離していると感じられる（青山・市川, 2006）など，外界からの刺激に反応しやすく，それを基準に行動しやすい外

拡型の特徴を現しており，「内向型」を示した「木寄り郡」や「家の中群」（根本, 1998）が，家族に対して依存的であったり（吉川, 2005），理想の自分と現実の自分の不一致（青山・市川, 2006）といった自己の内面への興味や内閉的な在り方といった「内向型」に通じるといった一貫性のある特徴を示しており，三上（1995）の提示した「人と家を関係付けた場合は外拡型に，人と木を関係付けた場合は内向型に相当する」という解釈仮説を支持している。

しかし一方で，アイデンティティ感覚との関連を検討した青山・市川（2006）の結果は，人が家・木どちら寄りに描かれたかということだけではなく，「接する」・「登る」・「見る」といった，人が他のアイテムにどのような形で関係付けて描かれているのかといった，より具体的な“関係付けの在り方”に注目することによって，質問紙などでは同一群内に含まれてしまうことによって単一化されてしまう，質的な差異を捉えることが出来ることができることを示唆しているといえる。

この視点から青山・市川（2006）を整理すると，①他者に見られている自分と本来の自分とが一致していないと感じている人（対他的同一性・拡散）や，現実社会の中で自分を位置づけられていると感じている人（心理・社会的同一性・確立）ほど，「人が木と接する」「人が木に登る」描画が多く出現し，対他・対社会といった，対象や環境を通して自分を捉える心的働きと，人と木が直接的・身体的に接触している描画特徴に関連があることが推察される。また，②自己の欲求や目標が明確な人（対自的同一性・確立）ほど，「人が木と接する」に加え，「人が木を見る」描画が多く，対自的に自分を内省し捉えようとする心的働きと，木とある程度の距離を保ちながら間接的な繋がりをもって，客観的に自己を視野に入れようとする方向性に関連があることが推察されるなど，人と木の関連付け方における「接する」・「登る」・「見る」といった違いに限定して考察をしても，これだけの質的な差異を見出すことが可能である。

このことから，3 アイテムの単なる位置関係だけではなく，人が，家や木といったアイテムと直接的・身体的に接触しているか，あるいは，間接的・象徴的に接触しているかといったより具体的な関係付けの在り方の観点から S-HTP を見ると，三上（1995）が「木寄りは内向型，家寄りは外向型」とした以上に，周囲の環境からの影響を受けた描画者の状態を反映されることが示された。そしてそれはまた，描画者が自分自身を含めた対象を，どのようなに関係付け，捉えていくかといった心的作業に関連するものと推測される。

4．今後の S-HTP 研究の展望

本研究は，三上（1979）以後発表された S-HTP の基礎的研究中心に，1) 臨床研究，2) 発達研究，3) 内容研究，4) 構造研究という 4 つの側面から概観した上で，「統合性」「遠近感」「人と家・木の関係付け」という S-HTP の全体的評価項目の特徴的な 3 つの観点から考察してきた。

その結果，1) 臨床的研究では，統合失調症患者やうつ病患者などの臨床群の弁別や，病態の変化などを反映する多くの項目，特徴が指摘され，全体的に，その有用性を支持するものが多かった。2) 発達的研究では，調査対象の年代にかかわらず描画発達の遅滞が指摘され，S-HTP においては，統合性や遠近感といった全体的評価項目や人物画の「半スティックフィガー」現象に反映されていることが明らかになった。また 3) 内容研究では，人と家・木の関係付けには，描画者の自身の行動

の基準を内的なものにもとめるか，外的なものに求めるかといった基本パターンが反映されることが明らかになり，単なるアイテムの位置付だけではなく，人が他のアイテムに接しているか否かといった具体的な配置からも考察していく必要性が示唆された。4)構造研究においては，S-HTP の最大の特徴である統合性を定量化するには，信頼性・妥当性も含めて検討を重ねる必要があること，そして，S-HTP を含めたテストバッテリーを使用する場合，その施行順序によって描画に表現される人格的側面が異なることが明らかになった。

また今回，S-HTP 研究を「統合性」「遠近感」「人と家・木との関連性」という 3 つの観点から考察することによって，これら 3 つの項目がそれぞれどのような心的側面，つまり，どのような心的次元における“個人―環境”の関係性における営みが捉えうるのかについて，一つの可能性を提示した。しかしながら，これらの観点は相互に関連しながら作用する，本来一繋がりの心的いとなみの多側面を表している可能性が強く，各項目を個別に捉えるのではなく，3 つの項目を統合する観点が，三上（1995）の提出した全体的評価の様に必要であると思われる。

この観点の 1 つの可能性として，S-HTP と同様に複数のアイテムを同一画面上に配置することで一つの風景を作り上げる風景構成法（Landscape Montage Technique, 以下，LMT と略）における「構成型」（高石, 1996）の概念は，非常に示唆的である。今回，考察の観点として挙げた 3 つの項目はそれぞれ，「統合性」は構成型の「①統合度」，「遠近感」は構成型の「②視点の定位度」，「③遠近感の有無」，「④立体表現の有無」にその概念の類似性から，意味的に関連させて考えることが出来ると考えられ，LMT の構成型のように，S-HTP も“構成の在り方”に注目することによって，個々の要素にこだわらない，描画全体の構成パターンを評価の一つの観点として使用できる可能性があると思われる。

しかし，LMT と S-HTP には，描画目標やアイテムの個数・内容・課題提示の方法など，描画構造の様々な差異が存在し，特に，継時的に課題が提示される LMT と，教示の際に全ての課題が一斉提示される S-HTP の課題提示の方法的違いは，その後の描画体験過程や，画面の構成の在り方においても大きな影響を与えると考えられ，慎重な検討が必要である。また，S-HTP で使用される 3 つのアイテムは，LMT における「中景群」のアイテムにあたり，日常生活において身近な対象であることや，上記した課題提示の違い，描画目標の違いから，S-HTP は，LMT よりも，中河原・小見山（1981）がその研究の中で示唆したパターン認識的な「場面」として描かれる可能性が非常に高いと考えられる。この LMT の遠近感を伴う「通景」としての統合性と，S-HTP の「場面」としての統合性とでは，それぞれに捉えうる心的側面が異なるであろうことは，想像に易く，これらの差異も含めて，描画者の内的／外的な＜関係性＞をよりよく捉える新たな評価項目に関して，慎重な検討が，今後必要であると思われる。

また，S-HTP は，実施も簡便で適用範囲も広く，多面的でより深いレベルの描画者のパーソナリティが投影されるという描画テスト全般に共通する特徴に加え，同一画面上に描かれたアイテム間の関係性という視点が加わったことにより，先に述べたように，より多様な評価・解釈が可能となり，検査そのものの精度や信頼性の向上（三上, 1995）や，捉えられる描画者の側面・範囲も増加したとされている。しかしながら，これまで行われてきた S-HTP 研究は，3 つのアイテムを同一画

面上に描くという点では一致をみているが，使用している用具や分析項目，分析の基準などが一致しておらず，得られた研究知見を純粋に比較することに関しても疑問が残る。今後，このような問題点も含め，更なる基礎的研究が積み重ねられ，様々な可能性が検討されていくことが求められるだろう。

引用文献

青山桂子・市川珠理 (2006). 青年期におけるアイデンティティの感覚と統合型 HTP の描画特徴. 心理臨床学研究, **24**(2), p232-237.

越川房子 (1989). 統合型 HTP テスト法における精神分裂病者と欝病者の描画分析. 早稲田大学大学院文学研究科紀要　別冊 **16** 集, p39-49.

福西勇夫・菊池道子・溝口純二 (2000a). 定量化への可能性（心の病の治療と描画法）. 現代のエスプリ, **390**, pp179-183.

福西勇夫・菊池道子・溝口純二 (2000b). 医学領域での使用とその可能性（心の病の治療と描画法）. 現代のエスプリ, **390**, pp184-198.

Hammer, E. (1958). The clinical Application of Projective drawing. C. C. Thomas.

平川義親・尾崎敏子・芦澤政子・坂野剛崇 (1997). 統合型 HTP 法を通しての非行少年の理解―少年事件調査実務への「統合型 HTP 法」導入の試み―. 調研紀要, **67**, p69-107.

細木照敬・中井久夫・大森淑子・高橋直美 (1971). 多面的 HTP の試み. 芸術療法, **3**, p61-65.

市橋秀夫 (1972). 慢性分裂病者の体験構造と描画様式, 絵画表現. 芸術療法, 4, p53-59..

市川珠理 (1988). 統合型 HTP 法における分裂病者の描画構造―多変量解析による分析―. 臨床精神医学, **17**(8), p1221-1233.

市川珠理 (2004). 描画法テストバッテリーにおける順序効果の検討―統合型 HTP 法(S-HTP)とバウムテスト―. 明治学院大学　心理学紀要, **14**, p47-56.

稲田圭子 (2003). S-HTP を用いた学童期・思春期の心象世界への接近―樹木・動物の描画変化との関連から―. 島根大学教育学部　心理臨床・教育相談室紀要, **1**, p63-72.

桑原 尚佐・森永 利英・濱野公子・山崎明郎・千葉美樹・萱間友道 (1998). 家事事件における描画テストの効果的活用方法について―統合型 HTP を中心にして―. 調研紀要, **68**, p25-57.

前川あさみ (1996). S-HTP 法を通した描画体験家庭の分析―絵を描くものと描画分析の交わるところ. 研究助成論文集, **32**, p80-91.

丸野廣・徳田良仁・徳田秀子・荻野恒一(1975). 破瓜病心象世界へのイメージ絵画療法的接近. 芸術療法, **6**, p23-37.

三上直子 (1979). 統合型 HTP 法における分裂病者の描画分析―一般成人との統計的比較―. 臨床精神医学, **8**, p79-90.

三上直子 (1992). 母子関係の悪化に対する予防的アプローチ―離婚家庭 13 組の母子にエゴグラムと統合型 HTP 法を施行して. 心理臨床学研究, **10**, p76-83.

三上直子 (1995). S-HTP 法―統合型 HTP 法による臨床的・発達的アプローチ―. 誠信書房.

三沢直子 (2002). 描画テストに表れた子どもの心の危機—S-HTP における 1981 年と 1997～99 年の比較 誠信書房.

三上直子・平川義親・尾崎敏子・芦澤政子・坂野剛崇 (1998). 非行少年の統合型 HTP 法に関する発達的アプローチ. 臨床描画研究 **13**, Pp196-217.

三上直子・岩崎和江 (1981). 統合型 HTP 法における幼稚園児から大学生までの描画発達—分裂病者の描画特徴との関連において—. 臨床精神医学, **10**, p1331-1339.

森田裕司 (1989). S-HTP 法における分裂病者の描画特徴. 心理臨床学研究, **6**(2), p29-39.

中河原通夫・小見山実 (1981). Synthetic House Tree Person 法に表現される描画パターンの研究. 芸術療法, **12**, p45-51.

根本旬子 (1998). 統合型 HTP 法における 3 アイテム間の位置関係ロールシャッハ・テストの体験型との関連. ロールシャッハ法研究, **2**, p33-43.

小山内實・玉田尚子 (2006). 描画にみる変貌する子どもたち—「家・木・人」描画(S-HTP 法)の徹底分析に向けて—. 三重大学教育実践総合センター紀要, **26**, p13-18.

須賀良一 (1985). 慢性分裂病における統合力の検討—分裂病者の描画の数量化 3 類による分析—. 臨床精神医学, **14**(5), p801-809.

田畑光司 (2006). 描画テストに関する基礎的研究—大学生の S-HTP—. 埼玉学園大学紀要　人間学部篇, **6**, p111-119.

高石恭子 (1996). 風景構成法における構成型の検討—自我発達の関連から. Pp239-264. (山中康裕, 風景構成法 その後の展開. 岩崎学術出版).

田中ネリ・阿部裕・井上孝代・岩木エリーザ (2007). S-HTP でみる在日外国人児童のこころ—ボリビア人児童との比較. 明治学院大学心理学部付属研究所紀要, **5**, p15-31.

高良聖・大森健一 (1994). 精神分裂病者における統合型 HTP 描画変化と予後との関連. 臨床精神医学, **23**(4), p485-497.

吉川奈緒子 (2005). 中学生において親子関係や家族の雰囲気が S-HTP に及ぼす影響. 龍谷大学大学院文学研究科紀要, **27**, p250-254.

吉武光世・森山直人・鈴木明人 (1985). 統合型 HTP 法における非行少年の描画分析. 犯罪心理学研究　第 **23** 巻特別号, p60-63.